



No. 116

ティー・ブレイク

Tea Break

職業適齢期

最近、晩婚化や少子化ということがいろいろと問題視されるようになってきているが、女性にしても男性にしても、平成の男女というのは、昭和の男女よりも10歳は若いように感じられる。

自分の場合で見ても、自分などは既に、もの心ついた頃の母親の年齢などはとうに過ぎているのであるが、その同年代の女性を見てみてもあの頃の母よりも遙かに若く見える。これは、自分も一緒に年をとっているからという理由ではないようにも思われる。

例えば、いまだにロングセラーとして続いている「サザエさん」などは、これはやはり昭和時代の古き良き時代を描いた家族アニメであると思うが、そこに出てくる波平の年齢は52歳である。これを聞くと「えーっ！」と思われる方が多いのではないだろうか。

けれども、よくよく考えてみれば、彼はきちんと会社に行っていたし、その仕事内容の話からして、定年間際のものではない。しかしながら、今の我々の感覚からすれば、彼の風体は隠居生活に入っている老人そのものであり、今の時代で考えれば70前後の年齢と思われても仕方のないところがある。

その配偶者であるフネさんは、波平の年齢からすれば、おそらく40代後半である。けれども、現在の40代後半の女性というのは、あのフネさんのような風体ではない。もっと若くてシャキッとしている。更に言えば、サザエさんとして24歳であり、マスオさんも20代の後半のはずである。どう見ても、その風体は、平成の目からみれば10歳ずつくらい違うのではないだろうか。

平成のお父さんとして有名なものとして例えば島耕作。取締役になった彼は、今のところ58歳である。さっきの波平よりも6歳年上である。けれども、どう照らしても、風体から見れば波平の方が年上である。けれども、ああやってバリバリ働くのが、平成の50代なのである。

ところで、以前私が「U-45」委員会で発言を求められた時に、「弁理士に定年制度を設けるのはどうか」というような提言をし、その時に「では、定年は何歳とお考えですか？」と聞かれた時に「50歳」と答えた。その際に、その会場が一瞬凍ったのを覚えている。当時の自分からすれば、あと10年以上も先の年齢であり、何の不自然さも感じなかった。そしてその時には、「50歳代」というものについて確かに昭和時代の波平のイメージがあった。

そうすると、弁理士の平均年齢が50代であることについて、「だからマズイ。若くてシャキッとしている弁理士を増やさねば」というようなことも言われるが、どうであろうか。やはり、職業適齢期というのは、最近になってぐんと高くなっているような気がするのである。

これについて、職業というものについて考えた場合には、その人が依然として居るから次の人間が育たない、というように言われる職業もある。言われる典型は、会社の経営者である。古い社長がいつまでも居座っているから、企業の社長が育たないと言われる、それである。

しかしながら、才能が強く要求されるものに対してはそういった現象が生じない。例えば、モーツアルトが居座っていたからといって、次のベートーベンが出てこないということはないのである。この辺のことを間違えて、単純に若返りを図ったり、何も考えずに世代交代をはかったりすると、とんでもないことになる。

であるから、世代交代などを考えるときには、非常に慎重にならなければならない。また、我々の職業や社会的役割というのを考えた場合には、「後ろの人が控えているから」というような理由だけで簡単に外されることがないように、日々の精進に努めたいものである。

(正)